

「火事場の馬鹿力」

常務取締役 企画部長

下川 利郎

Toshiro Shimokawa
Managing Director
General Manager of
Corporate Planning

「火事場の馬鹿力」という言葉がある。火事にあつた若いお嫁さんが仏壇を背負って裏山まで駆け上がったというような話を指す。当時の仏壇は祖先を祭つてあるところとして大切なばかりでなく、金庫の代わりもしていたようだ。普通では絶対に持ち上げられないはずなのに、緊急を要する緊張状態の下では思つてもみない力が出る。

先日、TVでこの「火事場の馬鹿力」を科学的に説明していた…。私達はふだん全力を出しているつもりでも、100%の力を出しきっているわけではない。100%の力を出すことによって筋肉や骨などが切れたり折れたりしないよう、無意識のうちに脳のリミッターが抑制をかけているのだ。この「余力」は3割程度もある。危機的状況下ではこのリミッターが外れて、100%の筋力が発揮されるのだが、これが「火事場の馬鹿力」の正体ということになる。私は、同じことが脳ミソ、つまり人間の精神的な能力についても言えると思つている。

米国で発表された学説によると、ふだん私達は脳140億個の脳細胞のうち5～10%程度しか使っていないのだという。それが「試験前だから追い込みをかけなければならない」とか、「どうしてもこの仕事を今日中に片づけなければならない」というような状況下に追い込まれると、「火事場の馬鹿力」的な能力が発揮されることになる。人間その気になれば、つまり緊張し、集中すれば、かなりのことがやれるのである。逆に、そうした機会に出会わないと、いつまで経つても自分の持つ潜在的な能力を知らないままに終わってしまうことになる。ここで大切なことは、この「必然性をもった厳しい状態」を自ら作り出すことはなかなか難しいということである。人間は弱い存在であるから、楽な道を歩みたがり、自ら進んで厳しい状況を作り出すことはしない。従つて、天がこれを創り、与えなければならないのである。

たまたま、この「火事場の馬鹿力」の裏番組としてNHKの大河ドラマ「毛利元就」が放映されていたのだ



が、この元就に滅ぼされた出雲の尼子家に山中鹿之助幸盛という武将がいた。

鹿之助は、十六歳で家督を継ぎ、山中家重代の「三日月」の建物（タテモノ）が付いた兜を譲り受けることになるが、この時、三日月に向かって「願わくば我に七難八苦を与え給え」と祈つたという。戦前、父が買ってくれた講談社の絵本「山中鹿之助」にこのことが書かれていて、幼な心になぜ彼があえて艱難辛苦を求めめるのか、不思議に思つたのである。

今思うに、彼は武人としての己の能力を極限まで発揮するきっかけとして、天が艱難辛苦を与えることを願つたのであろう。ご承知のように、鹿之助はその後、主家再興という大変な試練を天から与えられ、3度の挙兵を通じて持てる力を十二分に発揮し、再興の夢こそ達せられなかったが、「尼子十勇士」として後の世に語り継がれるほどの武勇を残すことになるのである。

顧みると、当社も、これまでいくつかの危機に見舞われている。伊勢湾台風、四日市公害問題、2度にわたる石油ショック等がそれである。私達はこうした問題に真正面から挑戦し、いずれも見事に克服をしてきた。今日、当社が世界に誇るサービス水準、環境対策、熱効率は何れもこれらの挑戦の成果と言えよう。そして、私達はこの挑戦を通じて、一回りも二回り大きく、逞しく成長してきた。

現在、電気事業は「経営の効率化」と「電気の安定供給」の相反する課題を両立させるという非常に困難な課題を与えられている。こここのところ効率化の要請ばかりが聞こえてくるが、これは創業以来の目標であった安定供給が完遂されつつあるからこそ、次なる課題として提起されたものと捉えるべきであろう…。したがって、トレードオフの問題としてではなく、両立を目指して真正面から取り組まねばならず、非常に厳しいが、必ずや解決の途はあると信じている。

上記のような理由で、私達は、今日の時代を千載一遇の機会と捉え、己の成長のためにも積極的に取り組む必要があるのではないだろうか。